九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フランス語の非再帰形自動詞と事象の内因性

井口，容子
広島大学大学院総合科学研究科 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1563558

出版情報：Stella. 34, pp.29-37, 2015-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

フランス語の非再帰形自動詞と事象の内因性

井　口　容　子

1．はじめに

「割る－割れる」「とかす－とける」といった状態変化を表す他動詞－自動詞の交替は「使役起動交替 causative-inchoative alternation」と呼ばれている。フランス語の使役起動交替においては，自動詞形態として（1）のように再帰形のみをとるもの，（2）のように非再帰形のみをとるもの，そして（3）のように再帰・非再帰両方の形態を許容するものがある。

（1）a．Paul a brisé les vitres.
　　b．Les vitres se sont brisées.
（2）a．On a fondu le plomb.
　　b．Le plomb a fondu.
（3）a．Paul a cassé la fenêtre.
　　b．La fenêtre s'est cassée.
　　c．La fenêtre a cassé.

フランス語の使役起動交替における自動詞用法をめぐっては，「再帰 / 非再帰」の形態的対立が意味的相違に対応するという主張がなされてきた（Rothemberg 1974, Zribi-Hertz 1987, 荒井 1988, Labelle 1992, 井口 1995, 2002, Doron & Labelle 2011）。Rothemberg にはじまるこれら一連の論文で述べられていることをまとめると，以下の２点に集約される。

（ｉ）外的原因 / 内的原因
　再帰形自動詞が外的原因による事象を表すのに対し，非再帰形自動詞は内的原因による事象を表す。

（ii）完了 / 未完了
　再帰形自動詞が，語彙的アスペクトにおいて完了的（telic）であるのに対し，非再帰形自動詞は未完了的（atelic）である[1)]。

ところが最近，こういった流れに一石を投じるかたちで，再帰 / 非再帰の対立は，意味的な相違に対応するものではない，と主張する論文が出された。Martin & Schäfer（2014）の “Anticausatives compete but do not differ in meaning : a French case study” がそれである。Martin & Schäfer の主張のうち，上記（ i ）の「内因性 / 外因性」に関連するものを，本稿においては取り上げて考察してみたい。筆者の立場は Martin & Schäfer とは異なり，「再帰 / 非再帰」の形態的対立は，やはり意味的な相違に対応するものと考える。ただ Martin & Schäfer が展開するさまざまな議論，およびその過程で示されたデータには興味深い点が多々見られることも事実である。本稿においてはそれらの検証を通して，従来の「内因性」という概念はあまりに大きすぎるくくりであると考え，その下位区分を設けることを提案する。その上でフランス語の使役起動交替における「意味と形の対応」の問題を新たな視点から考察する。

2．〈mettre NP à + inf.〉の構文

従来，非再帰形自動詞の内因性を示す根拠とされてきた現象のうち，まず〈mettre NP à + inf.〉の構文をとりあげてみたい。Doron & Labelle（2011）は，「再帰形自動詞 / 非再帰形自動詞」の相違が「外的原因 / 内的原因」の意味的相違に帰されることの証拠として，Zribi-Hertz（1987）を援用しながら，この構文をとりあげている。

（4）a．Le cuisinier a mis le sucre à *caraméliser*.
　　b．*Le cuisinier a mis le sucre à *se caraméliser*.
　　（Zribi-Hertz 1987）

Doron & Labelle は，〈mettre NP à + inf.〉の構文は，「自発的に生じるプロセスに対して，それに適した条件を提供する」ことを意味するという。したがって，inf. の位置に入り得るのは “internally-driven process” であるということになる。この観点から（4 a-b）のデータを見ると，許容される非再帰形の caraméliser は内因的事象であり，不可となる再帰形の se caraméliser は外因的事象ということになる（Doron & Labelle 2011：145）。

この Doron & Labelle（2011）の主張に対して，Martin & Schäfer（2014）は以下のような例をあげて反論する。

（5）a．* Il a mis les roses à fleurir / le pain à pourrir.

b. Il a mis la pâte à lever.

(Martin & Schäfer 2014：2492)

すなわち，(5 b) のように，この構文を許容する内因的事象の例がある一方で，(5 a) のように明らかに「内的原因」による事象でありながら，この構文を許容しないものもある。こういった事実を前に，〈mettre NP à + inf.〉の構文は上記の Doron & Labelle (2011) の主張とは異なり，à に後続する動詞の「内因性／外因性」には関係のない制約にゆだねられている，というのである。

たしかに「内因的事象」をすべてひとくくりにすれば，Martin & Schäfer が指摘するように，(5 a-b) の容認可能性の相違は問題となる。だが，本稿においては以下の点に注目したい。(5 a) の動詞である fleurir, pourrir が記述するのは，時とともに生物に本来的に生じる変化である。これに対して，〈mettre NP à + inf.〉の構文に許容される動詞は，「内因的事象」という点においては共通していても，これらとはかなり性質が異なるものである。この構文の代表的な例をいくつか見てみよう。

(6) a. J'ai mis le vin à rafraîchir.

b. Tu as mis de l'eau à chauffer ?

(以上『ロワイヤル仏和中辞典』)

c. mettre du linge à sécher

d. mettre du café à chauffer

(以上 *Le Petit Robert*)

e. mettre des légumes à cuire

(『小学館ロベール仏和大辞典』)

(7) は小説で見つけた例である。

(7) Les commerçants mirent à cuire une grande soupe et préparèrent un thé brûlant parfumé à la menthe.

(Halévy, *L'enfant et l'étoile*, p. 25)

これらの例に見られる動詞に共通する意味的特性を考えるとき，参考にしたいのが丸田 (1998) の語彙的使役動詞の分析である。丸田は，使役に「オンセット使役 onset causation」と「同延使役 extended causation」の 2 つのタイプを設ける Talmy (1985) の理論を取り入れ，定義に若干の変更を加えて語彙的使役動詞を下位区分している。丸田の定義によれば，オンセット使役とは「使

役主が，ある〈自立（律）的〉行為体を活性化させ――例えば，始動のきっかけを与えたり，動力を供給して――その行為体を通じて（through the medium of this participant）ある結果出来事を実現させる使役のタイプ」である（p. 99）。そして同延的な語彙的使役動詞においては「使役主のコントロールが結果出来事の惹起に全責任を負う」（p. 101）のに対して，オンセット的な語彙的使役動詞では「使役主の責任は結果出来事の始動面・動力供給面に限られ，変化体側で独自に展開される事態に使役主が直接介入することはない」（*ibid.*）という。

ここで注目したいのは，オンセット使役の場合，変化主体を一方的な変化の受け手（undergoer）ではなく，「自立（律）的行為体」とみなしている点である。使役主の役割は，それを「活性化」させることにすぎない。フランス語の〈mettre NP à + inf.〉の構文を許容する自動詞は，この点においてオンセット使役を表す他動詞に対応する自動詞に近い[2)]。

ここまでみてきた〈mettre NP à + inf.〉を許容する動詞は，chauffer, rafraîchir, cuire など，温度変化もしくはそれを伴う調理に関する語が多い。caraméliser もこの後者に含めることができるだろう。（6 c）の sécher は水の蒸発に伴う布類の状態変化である。湯を沸かすとき，ガスコンロなどの熱源に置いて作動させた後，沸いてしまうまで手を加えることはないだろう。もちろん熱エネルギーは外から持続的に供給されているわけであるが，その助けを借りて，水は沸騰した状態へと変化していく。これらの動詞が表す事態の変化主体は，丸田のいう「自立（律）的行為体」と見なすことができるのである。そしてこの意味において「内因性」を有するといえる。

〈mettre NP à + inf.〉の構文は，自動詞を不定詞として埋め込んで，他動詞的概念を作り出すものということができる。そしてこの構文の主語は，丸田のオンセット使役における「外的始動者 Ext-Initiator」（p. 101）の役割を担っているのである。

一方，丸田（1998）は上記のオンセット使役における「自立タイプ」の出来事と，「自発的 spontaneous」な出来事を区別している。自発的な出来事は，「その主参与者の内的原因・力によって引き起こされる自己始動型」の出来事であり，たとえば「笑う」という行為がその典型例である（p. 99）。以下に再掲する例文（5a）は，「内的原因による事象」であるにもかかわらず〈mettre NP à + inf.〉を許容しない例として Martin & Schäfer（2014）が挙げているもの

である。だがこれらの文における不定詞は，オンセット使役にかかわる「自立タイプの出来事」ではなく，丸田のいう「自発的出来事」を表すものといえる。このためこの構文を許容しないのである。

（5）a．*Il a mis les roses à fleurir / le pain à pourrir.
（Martin & Schäfer 2014：2492）

「花が咲く」あるいは「食物が腐敗する」といった事象は，時の流れとともに自然に起こる出来事である。もちろん Martin & Schäfer が指摘するように，人工的に開花や腐敗を引き起こす場合もありうるだろう。しかしながら日常生活において，それはむしろ特殊な事例である。これに対し，「人がパン生地を（発酵により）膨らませる」というのはごく日常的な光景である。「人の手がかかわって事を成り立たせる」ことが一般的と考えられる事態であり，（5b）［以下に再掲］が問題なく許容される所以である。

（5）b．Il a mis la pâte à lever.
（*Ibid.*）

3．使役化と反使役化

筆者は井口（2002）において，フランス語の自他交替にかんする内藤陽哉氏の以下のような指摘を紹介した。それによると，飲み物や食べ物を温めたり冷やしたりする場合，フランス人のインフォーマントは chauffer du lait / refroidir le melon といった他動詞形を用いた構文ではなく，faire chauffer du lait / mettre le melon à refroidir という，自動詞を用いた迂言形を好むという（筆者宛私信）。

このことは，chaffer, refroidir における変化主体が「自立（律）的行為体」であり，その意味においてこれらの動詞が「内因性」の事象を表すことを裏付けるものであると思われる。faire chauffer du lait に見られるような〈faire + inf.〉の場合においても，構文全体の主語は丸田のいう「外的始動者」の意味役割を担う。

fondre にかんしても同様の傾向が見られる。インフォーマントに（8a-b）を示したところ，以下のような結果になった[3)]。

（8）a．?*La chaleur a fondu la neige.
b．La chaleur a fait fondre la neige.

Haspelmath（1993）は自他の概念が対応する 31 の動詞を選び，21 の言語において形態の対応を調査している。これによるとフランス語においては以下のような結果になる（p. 113）。briser - se briser，ouvrir - s'ouvrir 等は「反使役化 Anticausative」，rouler，finir 等は「自他同形 Labile Alternation」として分類される。興味深いのは，fondre がそのままの形で他動詞用法を持っているにもかかわらず，「自他同形」ではなく，fondre - faire fondre という形で「使役化 Causative」として分類されていることである。このことは，上記（8a-b）の示す調査結果と一致している。Haspelmath が示した 31 の動詞ペアのうち，フランス語において「使役化」とみなされているのは，この他には bouillir - faire bouillir のみである。bouillir の場合には，辞書の記述をみても，他動詞用法は稀であり，*faire bouillir du lait*（『小学館ロベール仏和大辞典』）のような迂言形が定着しているようである。また，sécher および brûler は迂言形の用例も見られるが，Haspelmath の分類においては「自他同形」となっている。

Haspelmath（1993）は，使役起動交替においては Haiman（1980）等の「図像性の原則 principle of iconicity」が成り立っており，形態的派生の方向性が意味的な派生の方向性に対応すると考える。日常的な経験において「外的原因」によって引き起こされると感じられる頻度の高い事象は，形態的な派生においても，他動詞形がより基本となる「反使役化」の方向をとる。反対に「内的原因」により自発的に起こると感じられる事象は，自動詞形態を基本とする「使役化」の方向をとるのである。「自他同形」は意味的にこの 2 つの中間に位置するということになる。

フランス語の使役起動交替にもどれば，再帰形自動詞と，対応する他動詞形態との関係は，Haspelmath のいう「反使役化」であり，一方，非再帰形自動詞は「自他同形」，場合によっては「使役化」の関係にあるということになる。このことからも非再帰形自動詞の内因性がうかがえる。

4．［+human］について

Martin & Schäfer（2014）は，rougir / se rougir 等の，自動詞用法として非再帰・再帰形両方を有するタイプのものについて，事象の「内因性 / 外因性」にかかわらず，主語が［+human］の場合には再帰形態は許容されない，とする。（9）はその例である。

（9）a．Jeanne rougit.

b．*Jeanne se rougit.

そしてこの制約は，以下のような形で語用論的に説明できるという。すなわち，主語が［+human］の場合には，再帰形態は再帰（reflexive）と反使役（anticausative）[4] の解釈の間で曖昧である。この曖昧性（ambiguity）を避けるために非再帰形態が好まれる，というのである（p. 2491）。

Martin & Schäfer（2014）が，主語名詞句の［+human］という特性に注目していることは正しい。しかしながら，なぜ［+human］の場合に非再帰形が用いられるのか，という理由にかんしては，「再帰との曖昧性を避ける」といった語用論的要因で説明すべきではないと筆者は考える。ここでかかわってくるのは，やはり意味論的な要因なのである。［+human］の主語名詞句が「状態変化動詞」をとる場合，その動詞が表す概念は「時とともに生物に生じる変化」もしくは「生物の器官の自然な働きにより引き起こされる事象」（生理的事象）であることが多い。これらは第2節でみた fleurir と同様，丸田（1998：99）のいう「自発的出来事」に相当し，まさに「内的原因」によって引き起こされる事象である。非再帰形態をとるのはこのためである。

grandir, vieillir, maigrir は，この種の自動詞概念を表す場合には，いずれも非再帰形をとる。grandir を例にとると，「（生物が）大きくなる，成長する」の意味を表す場合は非再帰形のみ可能である。

（10）a．Marie a grandi.

b．*Marie s'est grandie.

（Labelle 1992：388）

再帰形態の自動詞 s'agrandir は接頭辞を伴う別の語彙である。いずれにしても生物の成長を表す場合には用いることはできない。

（11）a．*Cet enfant s'est agrandi.

（Labelle 1992：391）

b．cf. Les entreprises s'agrandissent.

（Rothemberg 1974：64）

5．結 語

以上，フランス語の使役起動交替における再帰／非再帰形自動詞について考

察してきた。我々は Martin & Schäfer（2014）とは異なり，この形態的対立はやはり「外的原因 / 内的原因」という意味的対立に対応するものと考える。ただし，従来「内的原因による事象」とされてきたものに，いくつかの下位クラスを設ける必要がある。ひとつは丸田（1998）の「自立タイプの出来事」に含まれる，rafraîchir, chauffer 等であり，〈mettre NP à + inf.〉の構文を許容する。もうひとつは丸田（1998）の言う意味での「自発的出来事」である。こちらは rougir, pâlir のような一時的な生理的事象と，fleurir, grandir のような時とともに生物に生じる変化など，さらにいくつかに下位分類する必要がある。この後者における動詞のうち，fleurir などは「非能格動詞」にかなり近い性格を持つと考えられる。筆者は井口（1995，2002）において，フランス語の非再帰形自動詞は非対格的性格と非能格的性格の両方を併せ持つものであると主張してきた。今後さらに精緻な意味論的分析を行いながら，考察を深めていきたい。

註

1）（ii）のアスペクト的観点に言及しているのは，Zribi-Hertz（1987）から。なお，Doron & Labelle（2011）では，若干視点を変えて，再帰形が「結果状態への到達 achievement of result state」を焦点化するものであるのに対し，非再帰形は「過程 process」を焦点化する，としているが，この点も興味深い。

2）丸田（1998）が「オンセット使役」とみなすもののうち，*The wind broke the window. / The window broke.*（p. 110）の使役起動交替に見られる break のような概念を表す動詞は，本稿の立場においては「外因的事象」であり，本節の考察の対象である sécher, rafraîchir 等とは異なる。

3）この調査は，筆者が井口（1995）を執筆したさいに行ったものである。

4）代名動詞の「反使役化 anticausative」の用法は，従来フランス語学で「中立的用法（中立的代名動詞）」と呼ばれていたものであり，筆者の最近の論文では「自発」と呼んでいるものである。本稿においては，丸田（1998）のいう「自発」の概念との混同を避けるために，使役起動交替の研究において一般的に使われているこの用語を用いた。

参考文献：

荒井文雄（1988）：「中立的代名動詞の派生について」,『フランス語学研究』第 22 号，日本フランス語学研究会.

Doron, E. & M. Labelle (2011) : « An Ergative Analysis of French Valency Alternation », Herschensohn, J. (ed.), *Romance Linguistics 2010*, Amsterdam : John Benjamins, 137-153.

Haiman, J. (1980) : « The Iconicity of Grammar : Isomorphism and Motivation », *Language* 56.

Haspelmath, J. (1993) : « More on the Typology of Inchoative / Causative Verb Alternations », Comrie, B. & M. Polinsky (eds.), *Causatives and Transitivity*, Amsterdam : John Benjamins, 87-120.

井口容子 (1995) :「フランス語の再帰 / 非再帰形自動詞と非対格性」,『言語文化研究』21 巻 (広島大学総合科学部紀要 V), 247-266.

井口容子 (2002) :「助動詞として avoir を選択する非対格動詞」,『ステラ』21 (九州大学フランス語フランス文学研究会), 71-86.

Labelle, M. (1992) : « Change of State and Valency », *Journal of Linguistics* 28, 375-414.

Martin, F. & F. Schäfer (2014) : « Anticausatives compete but do not differ in meaning : a French case Study », *Congrès Mondial de Linguistique Française - CMLF 2014, SHS Web of Conferences*, 2485-2500 (http://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2014/05/shsconf_cmlf14_01245.pdf).

丸田忠雄 (1998) :『使役動詞のアナトミー』, 松柏社 .

Rothemberg, M. (1974) : *Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*, La Haye : Mouton.

Talmy, L. (1985) : « Force Dynamics in Language and Thought », *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity at the Twenty-First Regional Meeting*, Chicago Linguistic Society, Chicago, IL., 293-337.

Zribi-Hertz, A. (1987) : « La réflexivité ergative en français moderne », *Le Français moderne* 55, 23-54.

[辞書]

Le Nouveau Petit Robert, nouvelle éd. du *Petit Robert*, Paris : Dictionnaire Le Robert, 2000.

田村毅他編『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社, 1985.

大賀正喜他編『小学館ロベール仏和大辞典』, 小学館, 1988.

[文学作品からの引用]

Halévy, D., *L'enfant et l'étoile*, 第三書房, 1985.